

Title	西班牙經濟史に関する三文献
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.9 (1933. 9) ,p.1347(165)- 1362(180)
JaLC DOI	10.14991/001.19330901-0165
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330901-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

西班牙經濟史に關する三文獻

高村象平

同じく西班牙史ではあるけれど、この國の一般史の領域では吾々に望蜀の念を起さしめること殆ど無いに反して、西班牙經濟史と銘打つたところの著書、論文に於いては然らず、その數量から見ても全く尠いと云つて誤り無いであらう。殊に外國語（西班牙語以外の）で書かれたものに就いては、私の寡聞に基くものであるかもしれないが、この感を深うするのである。（註）それ故に、いま、ハアヴアド大學のエドウィン・フランシス・デイ教授の在職二十五年記念論文集としてその門下生三十四名が各々一文を草した『Facts and Factors in Economic History. Camb. Mass. 1932. x. 757 pp.』なる書中に、西班牙經濟史に關するもの三つを見出すことは、この分野の研究に於いての甚だ大なる喜びであり、またこれ等は意義深きものを持つと云はねばならないであらう。私が茲にこの三つの論文を紹介する所以は、この近世初頭に於いて經濟史上輝かしき頁を持つにも拘らず、尙それに就いての勞作の數量の上から云つては看却されて居るとも見らるべきところの西班牙經濟史研究上に於いて、右の三つが寄與するところ大なるべきものあることを考へるからに外ならない。

（註）外國語で書かれた西班牙經濟史の主なる文獻は、次の如きものであらう。（但し一般經濟史に關する書中の一部分に述

イノホシ西のオのセ、ナツリリれを解べ。

Konrad Häbler, Die wirtschaftliche Blüte Spaniens im 16. Jahrhundert und ihr Verfall. Berlin, 1888.

Maurice Ansaux, Histoire Économique de la Prospérité et de la Décadence de l'Espagne au XVIIe et au XVIIIe siècles, in: Revue d'Économie Politique. Vol. VII. (1893.) pp. 509-66 et 1025-59.

Alfred Morel Fatio, L'Espagne au XVIIe et XVIIIe siècle. Paris. 1878.

Rudolf Leonhard, Agrarpolitik und Agrarreform in Spanien unter Karl III. München. 1909.

Julius Klein, The Mesta, a Study in Spanish Economic History, 1273-1836. Camb., Mass. 1920.

J. Fr. Bourgoing, Tableau de l'Espagne Moderne. 3 vols. 3 éd. 1803.

M. Block, Bevölkerung Spaniens und Portugals. Gotha. 1861.

Earl J. Hamilton, Une Monnaie en Période de Révolution Économique: Or, Argent et Billon en Castille de 1501 à 1650, in: Annales d'Histoire Économique et Sociale. Mars et Mai, 1932.

Ditto, Imports of American Gold and Silver in Spain, 1503-1660, in: Quarterly Journal of Economics, Vol. XIII. (1929.)

Ditto, Monetary Inflation in Castile, 1598-1660, in: Economic History, Vol. II. No. 6. (1931.) pp. 177-212.

Konrad Häbler, Die Geschichte der Fugger'schen Handlung in Spanien. Weimar. 1897.

C. v. Hoefler, Der Aufstand der kastilianischen Städte gegen Kaiser Karl V. Prag. 1876.

Wilhelm Roscher, The Spanish Colonial System. Transl. by E. G. Bourne. New York. 1904.

C. H. Harng, Trade and Navigation between Spain and the Indies. Camb. 1918.

Raymond Bonn, Probleme Mercantiliste en Espagne au XVIIe siècle. Bordeaux. 1911.

Alexander Wirminghaus, Zwei spanische Merkantilisten. (Gerónimo de Uztariz und Bernardo de Ulloa.) Jena. 1886.*

扱て右の中第一の論文は、Bourgoingと共にメスタの研究によつて周知の Julius Klein の稿々々 Medieval Spanish Guilds. (pp. 164-83.) である。彼は先づ西班牙の環境がクラフト・ギルド發展に有利なものであつたことを説く。即ち、イベリア半島の有する自然的利益、例へば多數の良港の存在は、海外貿易の發展を不可避的ならしめ、従つて中世西班牙の最初のギルド生活は當然カカロニア沿岸及びビスケイ沿岸に現はれたのであつた。ギルド制度を促進した第二の要素たるものは、この半島の包藏する資源、特に工業發展に肝要な原料の豊富なることであり、第三の要素は、半島が各王國及び各貴族の間に於いて、更に回教徒の侵入に對する恢復を目的として、長期に亘つて戦亂の巻たりし爲め、都市城壁内部の生活を親密ならしめたこと、第四は、この間斷なき戦亂と、回教徒驅逐後に於いても新大陸への欲求とが、多大の國費を必要とし、かくて商工業團體による國家財政の支持が重要となつたこと、最後には、異教徒に對する國民の十字軍的熱狂が、ギルド生活の初期の段階に主要なる宗教的因子を増大せしめたことであると云ふ。

次に、中世西班牙のギルド制度の端緒はいづれに求められるか。それは、天然資源の豊富なところからして採鑛冶金、製陶、採石、織布、食料生産の、組織的開發と統制との爲めに設けられた羅馬時代のコレギアであるか、或はその後西ゴット人の闖入期に設けられたものであらうか。否、この孰れもその始源たるものとは認め難し。と云ふのは、これ等兩者の間には繼續の證左もなく、また縦令あつたとしても(繼續を説く史家は Villa, Tramoyeres, Ibarra, Pujol 等である)、この初期の制度とギルドとの差異は全く根本的なものであつて、兩者は職人の集團とい

ふ廣汎な範疇以外に共通の根據を持たぬからである。例へば西ゴートの *Fuero Juzgo* 中に、手工業的活動の證跡は十分存するが、クラフト統制の爲めの秩序正しき集團の證左は無い。従つて工匠の工業上の組織といふよりは宗教上の組織たるゲルマンの *gild*、或はこれと對比さるべきゴートの制度が、西班牙に於けるコレギアと中世ギルドとの繋鎖として現はれたかは疑はしいのである。寧ろ、西班牙のギルドは羅馬人、ゴート人、ムウア人等の先行者の如何に拘りなく、またその地方に於ける類似の性質の先行者の有無に拘りなく、これを發生せしめる社會的環境から生じたもの、換言すれば、工業が發達し、手工業者がその相互的利益から、並びに謂はゞ暗黒的社會秩序内に於いて個々人を防衛する必要から、君主の命令を俟たずして集團生活を營み得た時と所とに於いてのみ生じたものと云はねばならない。

七一一年の回教徒の侵入による擾亂の收まるに従ひ、回教領域、基督教領域の各々に於いて、更にはこの兩者の間に於いて交易は發展し始めた。しかもムウア人はその版圖内に、基督教徒の經濟的及び宗教的生活様相の多くを保存せるのみならず、これとは全く獨立に、數學、天文學、古典等に關する彼等の傳來的知識を誘入し、更にその有する工業上の卓越せる技術はこの半島の豊富な原料と相結んで、こゝに工業發展上多大の寄與を爲した。通常史家はこのムウア人の工業がギルド組織の段階或はこれに類似する段階に到達するまでに發達したと云ふけれど、當時に於いては徒弟に關する制規以外にこれを確かめる資料は存しないのであつて、この時代に、生産物の統制と監督、度量衡の設定、作業條件の決定等は殆ど全部が *concejo*, *cabildo* (*town council*) の手中にあつたのである。とまれ、このムウア人の影響の下に生産技術が改善さるゝに隨ひ、生産者即消費者たることは止んで、分業が開始され、同一職業に従事する手工業者が自己並びに購買者の便宜上から恣意的に都市の各街または各區に分離居住することから集團的精神を體得し、こゝにギルド組織への基礎が作られたのである。

この初期のクラフトの地域的集合は教區を單位とする個々の職業の集中化を結果し、更に當時の恢復戰爭の宗教的熱病と結んでこの教區單位は、西班牙の社會生活の核心となり、従つて各クラフトが組織化するに伴ひ教區の聖者を戴き禮拜堂を有する集團たる *cofradia* (*congregaciones*, *solidades*, *hermandades*, *almosne*, *caritas*, *basilicas* と呼ばれる) が生じた。そして一四九二年ムウア人のグラナダ撤退に至るまで不斷に存した十字軍的熱狂によつて、この準宗教的組織は鞏固化された。勿論 *cofradia* (*fraternity*) は單なる敬神團體ではなく、工業上の集團的行動を目的とする謂ゆる政治的な、更に疾病その他の共濟を目的とする謂ゆる社會的な結合でもあつた。然し *gremio* (*guild*) と異つて工業統制の機能及び獨占の目的を有せざるものであり、従つて後年のギルドの宗教上の先行者の一つとして數へらるべきものではない。即ち一部の史家の論ずる如く、この宗教的 *cofradia* が十四世紀初頭に經濟的 *gremio* によつてとつて代られたとするは誤りである。(尤もアラゴン王國に於いて *cofradia* の名稱は、十二世紀初頭に始めて現はれ十八世紀に崩壊したクラフト・ギルドに適用され、この王國のギルド生活に關する古文書は數多く存するにも拘らず *gremio* なる名稱は原資料中には現はれて居ないのである。) それ故に *cofradia* は中世西班牙の手工業者の宗教的友愛組合をのみ意味するものでなく、工業發展史上、農奴制度下の工業からギルド制度下の工業への轉形過程の中間に存在して以つてこの推移を容易ならしめたものであると云はねばならぬ。この點から見れば、それは英蘭に於けるギルド商人の初期の宗教的社會的形態と似る。然し西班牙に於いては、ムウア人による工業的進歩の傳承と分業の發達との爲めに、商人と結んだ證左は殆ど或は全然無いのである。

十三世紀に至つて、工業統制、生産物の規格統一、親方日雇職人徒弟の階序、原料分配の集團的統制、作業條件

及び産額の監督等を目的とするクラフト・ギルドが廣く行はれるやうになつたが、これ等はすべて都市當局の規定するところであり、この反面に於いて各種クラフト・ギルドの代表者は、都市の商工業に關する立法や行政に參與するに至つた。この *cofrades* の非宗教的機能の漸次的發達は、王權にも干渉する程度に達することあつた爲め、場合により組織禁止令も發布されたが、そのギルド運動の強大な趨勢はこれによつて阻止せらるべくもなかつた。そしてムウア人をグラナダに圍ひ込んだ後、基督教君主がその力を各王國の鞏固化と商工業の建設とに注ぐに及び、西班牙全土に亘つてクラフト・ギルドの進展は著しく、遂に十四世紀末、この組織の經濟的目的が前面に立ち現はれるに至つた。勿論尙守護神の信奉、或る種の宗教的儀式等の名残りは存して居たが、大體に於いてこの半島では前記アラゴンを除いて十五世紀に、主として宗教的社會的目的の *cofrades* と、主として工業上の目的の *gremio* とは漸次に分離したのである。

gremio は十四世紀末漸次權勢を得て居り、内部的組織化、即ち成員に對する嚴格なる訓練、階序や作業條件等の詳細な規定等を發達せしめ、これ等による強制的加入は、こゝにギルドの獨占的統制の根柢を築いたのである。このギルド制度に關しての著書の詳細な検討に就いては別して紹介する要を見ないと思はれるから、こゝには省略する。

西班牙ギルド制度が十五世紀に衰頽し始めた原因として、著者は三つを擧げる。即ち西班牙ギルド制度の城塞とも云ふべきアラゴン王國の經濟力は一四四〇年代アルフォンソ五世治下にその絶頂に達したが、五八年崩じて後、バルバリー義勇海員の侵略、ポスフォラスに於ける土耳其人の勝利により、東部地中海に於ける商權は漸次に縮少せしめられた。而して半島が、アラゴン國王フェルナンドとカステリア女王イサベルとの婚儀による兩王國の併合を

端緒として統一せらるるに及び、この一般政治上の方針と君主の要求とにギルド制度を合致せしむべく企てられた。即ち手工業者は全部強制的に既存ギルドに加入せしめる、或は同一職業の彼等を集合してギルドを新設せしめる等、これ等の方策はギルドの強大化を計つてのものではなく、國內のあらゆる資源や制度を王權の下に統一せんが爲めのものであつた。そしてこの王室の強大な支配の下に、工業界に於けるギルドの自主權は失はれるに至つた。第二に、徒弟たる爲めには洗禮證明書と血統正しきことの證明を必要とした如く、異教徒糾問の熾烈に行はれた結果、工業上從來重要な役割を演じた猶太人及び回教徒改宗者間の優秀な職人、手工業者、商人等が驅逐された。例へばイベリア半島に於けるギルド生活の中心たりしバルセロナの工業は、一四九三年異教徒糾問が開始されてから急激に衰退したのである。而してフェルナンド及びイサベル治下の末年に於いて、主として王室より發布せられた數多き規制の方策によりギルド制度は益々不活潑に凝固化し、これはまたやがて西班牙の經濟的構造を衰滅せしめる誘因となつたのである。最後に、各都市の類似のギルドを國民的基礎の下に統合し、外國貿易を王權の下に集中化し、また生産技術、價格、販賣政策等を國民的に統一する等の目的を以つて、ここに數多くの特許や命令が公布せられたのであるが、然しその豫期せる効果はこれを收め得なかつた。蓋しギルドは公權力の不確定な中世に於いてこそ必要なものであつたが、十六世紀に於いては、時代は素より、政治的環境も亦異つて居るのであるが故に、王室が國民的統一の見地からギルドを利用せんと圖ることは、却つてその硬化を招來したのであり、工業も貿易も雪崩の如き規制や命令の下に全くその進展の餘地を埋められてしまつたのであつた。

第二に紹介する論文は *Abbott Payson Usher* の *Spanish Ships and Shipping in the Sixteenth and Seventeenth Centuries*. (pp. 189-213.) である。この論文は、同じ著者の *The Growth of English Shipping, 1572-*

1922, in: Quarterly Journal of Economics, Vol. XLII, (1928.) pp. 465-78. 又 Violet Barbour, Dutch and English Merchant Shipping in the Seventeenth Century, in: The Economic History Review, Vol. II, No. 2. (1930.) pp. 261-90. 等を参照すれば、その理解を助けること大であると思はれる。

中世に於いて西班牙ビスケイ沿岸は重要な造船地帯であり、十五世紀までビスケイ製の船舶は、北部西班牙とフランス地方との間の海運業の主要因子であつた。これに反してカタロニア沿岸もレヴァント及びフランスとの間の貿易上有名であつたが、造船はこの地方に於ける木材の劣質なる爲めさまで發達しなかつた。また南部のアンダルシアやカディス沿岸も大船建造用の良材なく、十六世紀後半以降に於いても漁船や沿岸航路船の建造が行はれるのみであつた。然し乍らビスケイの船匠が大商船建造の指導的地位を占めてヴェニス及びジェノアの船匠はその翼尾に従つたのではなく、ビスケイ地方は十三世紀に既に活躍して居たけれど、その船舶がヴェニスやジェノアで建造された船舶の大きさに達したといふ證左は無いのである。この地方は大西洋岸に位置するにも拘らず、その造船は地中海に於ける造船の傳統と甚だ一致するところがあり、十六世紀に於いても特殊船型を作り出すことはなかつたのである。例へば西班牙史上有名な galleon は、地中海に於いて普通見受けられる船型の單なる變形に過ぎないのであり、その起源は、十五世紀に於けるヴェニスの galleon に求められなうとしても、少くとも伊太利に發生したものであると云はねばならない。或は caraval にせよ carrack にせよ urca にせよ、その起源はヴェニス又はジェノア及びフランスであり、それがイベリア半島に於いて改造され、或は模倣されたに過ぎないのである。それはビスケイ地方の位置が折衷主義を利益とし、西班牙の貿易状態が、様々な種類の商船を必要としたからであつた。従つて西班牙及び葡萄牙の造船業の重要さは、諸船型の變形に存するのではなくして、この半島に於いて建

造された噸數の大なることに求められねばならないのである。

西班牙造船業の經驗主義と折衷主義も、大洋航海船には應用することが出来なかつた。新大陸との交易に際して大洋上に於ける多數の船舶の遭難は、國內で建造せられた船舶の能力に就いて疑惑を生ぜしめ、ここに於いて多數の外船が導入されるに至つた。(但しそれは通常西班牙人が所有し且つ乗組むことを要した。)この十七世紀前半の西班牙造船業の危機は、新大陸との貿易上からして建造標準や構造比率に就いて詳細な新規定が課されたことに基くか、造船原料供給の漸次的涸渇に基くか、和蘭造船業者の技術的優秀さの増大に基くかは、容易に決定し得ない問題であらう。然しこれ等のいづれも西班牙造船業の衰退の要素たることは疑ひない。即ち和蘭に於いては、技術上舊來の傳統を破つて近代的造船へ一步を踏み出した。例へば一五九五年始めて建造せられた *belem* に見得る如き船舶設計上の進歩によつて、船舶の全長は幅員に比して長くなつたのである。従來の三・五對三の比率は四對一、五對一に變更せられ、艤裝も變つた。また和蘭では造船所の組織や設備上にも進歩を示した。然るに一五九〇—一六三〇年に於いて西班牙の船匠は、設計上に改修を加へることもなく、航海能力改善に對する需要に應ずべき努力も試みず、現存の船型の精巧化にのみ注意を集中したのであつた。

第二に、西班牙造船業者は一六二五—一三〇年の頃、タアル、ピッチ、檣、索具及び帆布用の麻布、帆木綿等を、海外よりの輸入に俟たねばならなかつた。更に、新大陸に於ける造船の發達は、本國の造船業に影響を與へ、十七世紀に植民地貿易に従事した船腹の可成りの部分は、植民地に於いて建造せられたものであつた。これ等はまさにスペイン造船業の衰退を物語るものである。然し十七世紀は貿易減退の時期であつたのであるから、ひとり西班牙本土の造船所の活躍の減少を誇張することあつてはならないのである。

次いで著者は、未だ組織的に研究せられたことのないところの、セヴィリアの Archivo General de las Indias に存する新大陸への海運状態に關する資料や、その他信憑すべき文献の檢索によつて、一五〇六——一七七七年の新大陸に向け西班牙を出帆せる、及び新大陸より西班牙に入港せる船舶の總噸數及び平均の大きさが、普通想像せられるよりも少いことを云ふ。それは、大多數の船舶が運送品の性質と經濟と安全との點からして、五百噸以下のものを使用したからである。尙、新大陸への貿易と西班牙の全貿易との關係に就いて判定を下すべき十分な資料は存しないが、一五九八年八月乃至翌年八月にビルバオ入港の船舶記録と、西班牙及び葡萄牙の商船隊に就いての一六一一年の Thome Cano の記述からして、新大陸への貿易はその數量上からは北歐との貿易よりも少く、新大陸への商船隊は西班牙船舶總噸數(海權擴張の絶頂たる一五八五年頃に約十七萬五千噸であり、北歐諸國中にあつて第二位を占めて居た)の五分の一であつたと云ふことが出来るのである。

要するに西班牙海運業の減退は一六〇〇年以降に於いて見られるが、これはこの國の十七世紀及び十八世紀初頭の一般經濟的衰頹の反映たるものである。勿論海運業及び造船業に於ける國際的競争の激烈なりしことは、この逆調に積極的に影響するところあつたが、然し造船業はそれ自體この國の産業状態によつて影響を蒙つたものと云はねばならぬ。

最後は、Earl J. Hamilton, Spanish Merkantism before 1700. (pp. 214-39.) である。ハプスブルク王朝の下に於いて西班牙は、アラゴン、カステイリア、カタロニア、ナヴァラ、ヴァレンシアの國會、憲法、貨幣制度關稅等を夫々異にする五王國の同盟より成るものであつたが、著者はこの論文に於いて、この五王國の中で、十六世紀末西班牙全土の七割五分を占め、全人口の八割五分を有するカステイリアを中心として、正貨に關するマアカ

ンティリストの理論と實踐とを歸納的に研究するのである。

一四七五年フェルナンドとイサベルの即位の當時、混亂を極めて居たカステイリアの經濟及び政治状態は、絶對主義的王政、集權化、父權主義にとつて絶好の場所であつた。否、西班牙全土に互つてマアカシタイル・システムの自生的出現は不可避であつたのである。グラナダの征服とアラゴンの地中海に於ける版圖の獲得は、謂ゆる帝國主義を助長し、數多くの戰鬪と物價の永續的下落とによつて金銀の重要さを増大した時に當つてのイスパニヨラに於ける金の發見は、商業の制限と植民地の排他主義とを喚起し、原始諸産業の優越と製造工業の缺乏とは、保護主義的感情を生んだ。云ふまでもなく植民地の開拓と保護には強大な船隊が必要である。その結果、多くの航海條例が發布され船舶補助金が下附された。一五一六年に始まるハプスブルク王朝はそれに先き立つカチ力教諸王のマアカシタイル・システムを改變し擴張こそしたが、急激に變更することはなかつたのであつた。

マアカンティリズム時代を通じて金銀鑛山を獨占した西班牙は、他の諸國に劣らず金銀を蓄積し保持せんことに努めた。この爲めの様々な方策の中で、第一に採用されたのは正貨輸出の禁止であつた。勿論これは一二六八年アルフォンソ十世の金銀輸出禁止に見る如く、マアカンティル・システム以前から行はれたのであるが、これ等の禁止による經濟力と兵力の増大といふ目的はマアカンティリズム的のものであつたと云はねばならない。第二の方策は、亞米利加の金銀を何よりもカステイリアに運び入れる爲めに行はれたところの、運送の監視、新大陸貿易から外國人の排除、移民の統制、植民地相互間の貿易の制限及び禁止、護送船隊制度等である。

この正貨輸出禁止令は十四、五世紀に於いて屢繰り返へされたが、殆ど效果なく、その結果は貨幣の缺乏を生じた。そして十六、七世紀フェリイペ三世及び四世治下に於けるヴェリヨ・インフレシヨンと、西班牙と他の諸

國との物價の懸隔とによつて、金銀の流出は更に促進せしめられ、これは亞米利加からの金銀流入の減少と相俟つて、救濟的立法を再三必要ならしめたが、いづれもさして效果はなかつたのである。金銀の輸出を禁じたのはカステイリアのみではない。たゞヴァレンシア王國に於いては、必需食料品輸入に際してのみ金銀の輸出を許した。而して一七〇〇年前、正貨輸出禁止の見地からして、各王國は爾餘の四王國と外國との間に何等差別するところなく五王國の二から他へ金銀を輸送する完全な自由は存しなかつたのである。

しかもこの反面に於いて、カルロス五世が選舉侯買収の爲めにフッガア、ヴェルザア、その他フロオレンス及びチェノアから八十五萬フロリン餘も借り入れてから約二百年間は、戰費調達の爲めハプスブルク王朝は常に外國資本家に依倚して居り、この支援の代償として貨幣輸出が彼等に特許せられたのである。

國內生産者保護の目的を以つて、酒類、生絲、小間物類の輸入は禁ぜられ、外國毛織物はギルドの検査を経ることとして、國內工業を間接的に保護した外、一六二三年には各種完成品の輸入が禁止された。而して國內に於ける重要原料の大なる生産は、これを國內製造工業の使用に當てる爲めに輸出を制限されたが、單に原料を國內に保全するのみに止まらず、麻や亞麻の如き佛蘭西やフランダース地方から大量輸入されるものは、本國や植民地でそれ等の生産を増大すべく、また植民地は蘇方材、皮革、羊毛、洋紅等を以つて本國の海運を助成するやう命令されたのである。而して大體に於いて植民地の商工業に對しては自由主義的政策が採られたが、それは本國が植民地製造工業に關心を持つことと鑛業に比して少きが爲めであり、國內消費用の製造工業は阻止せらるることなく、また如何なる工業も海外市場でカステイリアと競争せざる限り放任せられた。然し他方に於いてカステイリアは植民地商品の爲めに本國市場を保障する努力を殆ど拂ふところなかつたのである。カステイリア及びアラゴンのマアカンティ

リストの理論及び實踐に於いて、保護關稅は殆ど採り上げられなかつた。そして國民的關稅制度の缺欠と、外國商品に對する關稅徵收は物品稅の遁脱を生ずといふ一般的信念とは、保護關稅に對する西班牙マアカンティリスト及び爲政者の無關心を物語るものに外ならない。

十六、七世紀の西班牙マアカンティリスト及び爲政者は、貨幣と財富とを同一視した。そして更に彼等は、金銀の流出を外國爲替の法外な相場に歸することなかつたのである。西班牙と他國との物價の懸隔は、商業取引に基く爲替手形による國際支拂を比較的重要なものとし、爲替相場は正貨輸出點に保たれ、かくて貨幣は通常海外に送られ、マアカンティリストの注意は外國爲替から逸らされたのであつた。更に一七〇〇年前の著名な西班牙マアカンティリストの大多數は僧侶であり、經濟上の文獻にも金融上進歩した國民の生活にも通曉せず、外國爲替を討究するに必要な經濟上の知識を會得すべき機會も有さなかつたのである。

西班牙マアカンティリストは、正貨輸出禁止の不完全なることを認め、順調な貿易均衡によつて金銀を蓄積すべきことを説いた。メキシコ及びペルウの銀の流入によつて促進された西班牙の物價騰貴が金銀の大なる流出を開始した直後、一五五八年に Luis Ortiz がフェリイベニ世に提出した Memorial al Rey Para que no Salga Dinero del Reino は貿易均衡論を明瞭に説いたものであり、貿易均衡が順調ならば貨幣は流出せざるのみならず他國より流入し、ここに於いて過度の物價は必然的に下落すると主張し、更に産業の父權主義的規制を論じた。而して十七世紀に於ける亞米利加金銀輸入の破局的減退、破滅的ヴェリオン・インフレーションに基く金銀の大なる輸出、全くの經濟的頹廢、歐羅巴の覇權が他國に移つたといふ自覺は、これ等の對策の討究を盛ならしめ、ここに刊行された著名なマアカンティリストの著書は、Moncada, Cevallos, Navarrete, Ossau, Fajardo, Mata, Borrnel, Osorio y

Reina 等の手に成るものである。これ等はその細部の點に於いては夫々相違して居るが、いづれも正貨輸出禁止の無益を認め順調な貿易均衡のみが繁榮をとり戻すといふ點では一致して居るのである。

西班牙マアカンテイリストは純然たる思索には傾倒すること殆どなく、經濟理論上には大なる寄與を爲さなかつた。然し十七世紀に於けるこの國の退歩に刺戟され、經濟力と福祉とに資する價值多き改革案を編み出した。その改革綱領は、技術教育、職人の移入、通貨の復舊、灌漑の擴張、國內水路の改善等を含むものであつた。

終りにハミルトンは西班牙マアカンテイリズムの顯著なる結果を擧げる。亞米利加の急激な植民地開拓は金銀鑛山に基くものであるが、このサカテイカスやプトン等へ引きつけられたことは、プラタ河地方の如き肥沃なる土地の開拓を看却せしめた。セヴィリアによる獨占と商船隊制度とは却つてその供給を不完全ならしめ、歐羅巴に於ける物價騰貴を導き、植民地に於いて母國に對する不満を創り出した。次に西班牙製造工業の進歩に就いての十分な資料はないが、暫時、工業は物價騰貴の影響を受けたと思はれる。然し正貨の人爲的蓄積によつて高められたこの國と他國との物價の懸隔は、輸出工業、造船業、航海を不利ならしめ、亞米利加の金銀によつて描き出された繁榮の幻想は、攻勢的對外政策、筋肉勞働に對する輕侮、浮浪、奢侈、浪費その他十七世紀の經濟的頹廢に資した諸現象を生んだのであつた。

これを要するに、十七世紀に於ける歐羅巴マアカンテイリズムの進歩は、亞米利加の金銀輸入と、十六世紀に於ける西班牙の歐羅巴霸權掌握との相關係によつて促進されたものである。しかも一六六〇年以降の西班牙産業の退歩と貧窮とは、禁止制度に疑惑を抱かしめるに至り、輸出禁止を以つてしても逆な貿易均衡の前にはメキシコ及びペルウの銀を無限に蓄積するを得ないことが明かになつた時、達眼のマアカンテイリスト及び爲政者は貿易均衡によ

つて正貨の移動を統制せんとするに至つたのである。そして十六、七世紀の價格革命は貨幣數量説を優勢ならしめこの説は正貨の無限の蓄積の夢を破り、やがてマアカンテイリズムの衰退に寄與したのであつたと、ハミルトンは結ぶ。

これ等の三論文に對しては別して批評を加ふる要はないであらう。たゞ右の紹介によつて西班牙が中世後期並びに近世初期の歐羅巴經濟史上に於いて顯はにせる特殊性を認められ得るならば、それで本稿の使命は果されたと做さるべきものであるからである。例へば最後の論文に於いて看取られるやうに、西班牙の物價騰貴は新大陸に於ける金銀生産の増加に因るものとして論ぜられた。然しこの物價騰貴は、新大陸に於ける金銀の生産費低下によるこの諸商品の相對的價値の増加、従つて金銀貨幣によつて評量せられる諸商品の價格騰貴なのであり、またこの騰貴は正常的なものであつたことが、今日に於いては明かにされて居る。然しかかる批判をさしはさむことは、これはその場所ではないであらう。或は第二の論文に於いて見らるる如く、この國の航海業の發展が停滯し退化したのは、その經濟的圏域に於ける衰滅への動向の然らしめるところであつた。この點に於いて著者は交通技術からの一義的説明に陥ることなく、その着眼は當を得て居ると云はねばならない。しかも尙この國の經濟發展が、即ち農業、工業、商業、航海業の發展が、停滯し遂に衰滅するに至つた事情に觸れるところ無きことは、聊か物足らぬところ無しとしないのである。これを端的に云へば、ヴィットフォゲルも指摘して居るやうに、「人工的灌漑こそがこの國土の土地構成の上に依存する生産形態」であつたのである。「この生産形態の上に、この國の産業的隆盛がアラビア人の支配下に於いて起つたのであつた」。それが、やがてこの「ムウア人の高度に發展せる農業や園藝の基礎たりし灌漑事業の大部分の破壊」(エンゲルス)と共に、この國家の國民的活動の源泉は涸渇するに至つたのである。

然しその説明の根源にまで溯ることを要求するとは、或はその論題の範圍を遙かに遡出したものであり、過大な要求であると云はれるかも知れない。けれども、何等かの形式でこの事情にまで言及することなくしては、眞に經濟的領域からの説明たるものではなくなる、或は少くともその重要さは薄められるのではないかと思はれる。そして斯くの如く考へるのは、謂ゆる公式主義の偏重の然らしめるところであるとのみは云ひきれぬものを持つと考へられるのである。

(一九三三・七・二四・稿)

* この稿を草して後に、西班牙經濟史に関する著書として昨年 *Bibliothèque de l'École des hautes études hispaniques* の第十七篇及び第十八編が刊行せられたことを知った。それ等は次の如き書名を持つものである。

- Albert Girard, *Le commerce français à Séville et Cadix au temps des Habsbourgs. Contribution à l'étude du commerce étranger en Espagne aux 16. et 18. siècles.* Paris. 1932. (XXIV, 607 p.)
- Ditto, *La rivalité commerciale et maritime entre Séville et Cadix jusqu'à la fin du 18. siècle.* Paris. 1932. (XIV, 123 p.)

最近經濟文献

(昭和八年七月二十日調)

〔理論經濟學〕

- *分配學說研究 今川尙著 菊判 弘文堂
- *生の經濟哲學 高木友三郎著 菊判五四〇頁 森山書店
- 科學に於ける方法と範疇の問題—三枝氏「資本論の辨證法」批判—(唯物論研究、第十號、昭和八・八、八四—一〇〇頁) 石濱 哲夫
- Ideotypus 概念を中心として(大阪商科大学經濟研究年報、第三號、昭和八・七、七一—九二頁) 勝本 鼎一
- 經濟生活の綜合的把握への管見—福田徳三博士追憶論文集における杉村、宮田、大熊諸教授の所説について—(國民經濟雜誌、五五卷二號、昭和八・八、四九—六七頁) 赤松 要
- ハイエック「經濟的思维的傾向」(經濟學論集、三卷七號、昭和八・七、一〇二—一〇七頁) 安井 琢磨
- 利子の資本蓄積に及ぼす作用(經濟論叢、三七卷二號、昭和八・八、一八一—三五頁) 高田 保馬
- 資本蓄積論(經濟論叢、三七卷二號、昭和八・八、八九—一一〇頁) 柴口 敬
- 「價值論の諸問題」セーゼス及びシュビートオフ論纂(三田學會雜誌、二七卷八號、昭和八・八、一〇七—一一五頁) 三田學 氣賀 健三

最近經濟文献

- 二つの分配理論—「勢力と經濟法則」に就て—(經濟學論集、三卷八號、昭和八・八、四〇—八一頁) 木村 健康
- 準獨占双方獨占及補完獨占到於ける價格理論(經濟學研究、三卷二號、昭和八・六、六九—一一五頁) 栗村 雄吉
- レオン・ソルラス、平塚壽郎譯「純粹經濟學要論」(三田學會雜誌、二七卷八號、昭和八・八、九一—九五頁) 永川 清
- 手塚壽郎譯「レオン・ソルラス純粹經濟學要論」上卷(經濟學論集、三卷八號、昭和八・八、一四三—一四九頁) 安井 琢磨
- ケインズの貨幣理論(四)—「A Treatise on money」の研究—(經濟學研究、三卷二號、昭和八・六、一一六—八頁) 高橋 正雄
- ポーズの爲替理論(經濟學研究、三卷二號、昭和八・六、二〇九—二五〇頁) 大森 研造
- 小作料の地代範疇について—小作農は農奴か—(大原社會問題研究所雜誌、十卷二號、昭和八・七、四一—八一頁) 榑田 民藏
- マルクス記念論集「資本論」研究(唯物論研究、第十號、昭和八・八、一一九—一二二頁) 三枝 博音
- マルクスのヴァグネル批評(大原社會問題研究所雜誌、十卷二號、昭和八・七、八一—一〇二頁) 久留間敏造譯
- * Ely, R. J., and G. R. Wicker: *Elementary principles of economics.* Rev. and adapted for English students by L. L.

一八一 (一三六三)